

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：32695

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770309

研究課題名(和文)越境する象徴的な自然についての文化人類学的研究

研究課題名(英文)An anthropological study of the globalisation of symbolic concepts of nature

研究代表者

堂下 恵 (Doshita, Megumi)

多摩大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：90434464

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では自然観といった「象徴的な自然」が越境する様相を精査して脱領域化・再領域化のメカニズムを解明しようと試みた。文化人類学的手法を用いて、日本の里山、イギリスの鉱山景観、メキシコの鉱山景観・街並みを対象に調査をおこなった。その結果、各事例において「象徴的な自然」がローカルからナショナルへ越境する時には自然観等が一般化されて浸透していくこと、ナショナルからグローバルへ越境する際には「象徴的な自然」の解釈が専門的な用語で置き換えられて受容できる人々が限定されてしまうこと、グローバルからローカルへ再領域化する際には「象徴的な自然」が重層的に解釈・説明されて多様化することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to examine the de-territorialisation and re-territorialisation of symbolic concepts of nature by conducting anthropological fieldwork on the satoyama landscape in Japan, the mining landscape in the UK, and the mining landscape and townscape in Mexico. According to the fieldwork in different areas, when a symbolic concept of nature is de-territorialised from local to national areas, its understanding is generalised and shared by various stakeholders. In contrast, when the symbolic concept spreads in the international society, its understanding is specified and interpreted by using scientific words. As a result, only professionals and the selected people can share its value. When that symbolic concept, which is shared globally, is re-territorialised to local areas, many people provide their own perspectives on the same natural settings or landscape, and the understanding of symbolic concept of nature will become diverse.

研究分野：文化人類学

キーワード：象徴的な自然 越境 景観 観光利用

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した平成 25 (2013) 年度初頭において、グローバル化に関する研究は既に盛んであった。しかし、自然像や自然観といった「象徴的な自然」が越境する様相を精査して脱領域化・再領域化のメカニズムを解明しようとした研究はあまりなかった。そこで本研究では、「象徴的な自然」の越境を考究しようと試みた。

2. 研究の目的

本研究課題を申請した当初、既にグローバル化に関する研究は盛んであり、自然環境に関する事象についても、農林水産物等が地域を越えて移動し流通する現象の解明は進んでいた。しかし、自然像や自然観といった「象徴的な自然」に着目した研究はまだあまりなかった。そこで、本研究では「象徴的な自然」がグローバル化の進む中で越境する様相を精査して脱領域化・再領域化するメカニズムを解明することを研究の目的に設定した。具体的には、里山が SATOYAMA として世界でも知られつつあったことに着目し、平成 22 (2010) 年に提唱された「SATOYAMA Initiative」を対象に文化人類学的手法を用いて研究を進めることにした。

3. 研究の方法

本研究では文献調査と実地調査を実施し、文献調査については景観、国際的な保護制度、観光実践等を意識してグローバル化に関連した文献を収集し、先行研究を再考した。実地調査は文化人類学的手法を用いて、まずは日本国内で里山ならびに「SATOYAMA Initiative」の活動を対象に実施した。当初の予定では、「SATOYAMA Initiative」国際パートナーシップに加盟する英語圏ならびに非欧米地域の NGO や関連地域を対象に比較調査を実施する予定であった。だが、国内での調査結果から、英語圏における「象徴的な自然」の越境を十全に調査した方が良いと判断し、世界文化遺産にも登録されているイギリス・コーンウォール州の鉱山景観を対象として実地調査をおこなった。さらに非欧米地域との比較調査として、イギリス・コーンウォール州と結びつきの深いメキシコ・イダルゴ州での調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 里山 / SATOYAMA の越境

「里山」は現在では広く知られた言葉であり、人と自然が共生して創り上げた包括的な農村景観を指す。しかし、かつてこの語は薪炭林、村里近い森林等、地域によって少し異なる意味を持つ、森林の一形態を指す言葉であった。里山の意味が森林の一形態から農村景観全体へと変化したのは、国内で環境保護運動が隆盛する中でローカルからナショナルへと使用される場が変わり、多くの人々が広く言及するようになって、より包括的な意

味で捉えられるようになったからである。

2000 年代後半になると、この「里山」を国際的に評価しようという動きが出てくる。2006 年から準備・実施された「日本の里山里海評価」は、国連事務総長の呼びかけで実施された「ミレニアム生態系評価」の準地球規模評価の枠組みを適用した里山・里海の生態系評価である。この評価の報告書において、里山・里海は「人間の福利に資する様々な生態系サービスを提供する管理された社会・生態学的システムで構成される動的モザイク」と定義づけられた。環境保護運動のなかで形成された「包括的な農村景観」という意味が、科学的で専門的な説明に置き換えられたのである。また、この評価結果は 2010 年の生物多様性条約第 10 回締約国会議で提案された「SATOYAMA Initiative」に大きく寄与している。SATOYAMA Initiative においては、SATOYAMA と銘打ったのは裏腹に、里山は「社会生態学的生産ランドスケープ」の一例だと紹介されている。里山が SATOYAMA として世界に発信され、使用の場がナショナルからグローバルへと変化すると、意味が専門的で科学的なものになり、専門化・卓越化されて使用対象が限定されるのである。

加えて、実際に「SATOYAMA Initiative」国際パートナーシップの会合で参与観察を実施してみると、国内の里山保全関係者が参加する日本語でのプログラムと、国際パートナーシップ関係者が参加する英語でのプログラムが分離されて並列的に実施されており、里山保全に直接的に関わる日本人と海外からの参加者のコミュニケーションが分断されていた。里山が SATOYAMA になることによって、里山保全に関わる日本人が国際的な保護の議論から除外されてしまったのではと危惧される。

以上、里山 / SATOYAMA のグローバル化についていえることは、里山という語がローカルからナショナルに浸透していく際には、地域差のあった意味が統合され、包括的な農村景観を指す用語として広く認知されるようになった。だが、ナショナルからグローバルに浸透していく際には、里山の意味が専門的、科学的な表現に置き換えられ、日本の里山保全に尽力している人々が SATOYAMA の議論の外に置かれてしまう。象徴的な自然の越境に関して、ローカルからナショナルへの移行については広義な意味や観念が確立され共有される方向に動くのに対して、ナショナルからグローバルへという移行では、専門的な表現で説明されるようになり、狭義の意味に置き換えられて受容可能な人々が限定されていくといえる。

(2) 文化的景観の越境

里山 / SATOYAMA の事例では、日本の里山が世界に浸透していく際に、専門的・科学的で狭義の意味に置き換えられることがわかった。そこで、英語を母国語とする地域ではど

のような象徴的な自然の越境が起きているのかを解明すべきだと判断し、世界文化遺産・文化的景観に登録されているイギリスの「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」を対象にコーンウォール州で実地調査をおこなった。

「景観」は文化人類学等の学問分野では、自然や環境とは異なり、人々の文化的社会的背景や想像力と目の前に広がる事象とで形成される、主観的なイメージであると理解される（例えば Hirsch 1995）。イギリスにおける景観の議論の中には、田園がどのように歴史的に変容してきたのか、また人々の生活・生業が地域にどのように関与してきたのか、を景観に着目して分析するのが有用だというものがある（Hoskins 1977）。景観に着目することは、人々の主観的なイメージも包括して調査対象とすることができるので、「象徴的な自然」の越境を検討するのに有用であると判断した。

イギリスの「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」はその名のとおり二州にまたがった範囲が世界遺産として登録されている。だが、コーンウォールは独立自治の地域であるという地域感情が根強い。地域住民は自らを「コーニッシュ」と呼び、国旗、国歌、言語等を有すると主張する。コーンウォールは古代からスズ等の鉱業が興った地域で、鉱物資源を求めて様々な国・民族が入植してきた歴史がある。10世紀にイングランド統一によって領土の一部となった後も、ノルマン人の入植やスペイン人による侵略が起きている。一方、13世紀には鉱業を中心として自治を担う組織「スズ鉱業地」が設立され、コーンウォール統治に大きな役割を果たしてきた。

18 - 19世紀には石炭を使用し蒸気を利用した鉱業が発展し、特にウェールズとの石炭と鉱物資源の移出入が盛んに行われ、イギリスの産業革命の一翼を担った。また、19世紀以降は鉱業技術を身につけたコーンウォール人が中南米、オーストラリア、アメリカ、南アフリカの鉱山へ技術者として渡っている。コーンウォールはまた風光明媚な場所としても知られており、鉄道を利用した近代観光の先進地でもあった。

コーンウォールの鉱山にはレンガ造りの建造物が多く、現地では若草色の牧草地や低木林から成る田園風景の中にレンガの煙突や建物が散在する長閑な景観を形成している。このコーンウォールの自然と鉱山遺産が織りなす景観が世界遺産に登録されているのであるが、世界遺産登録において評価されたのは一部である。具体的な選定ポイントとなったのは、産業革命発祥の地・イギリスの鉱業の中でも近代化の刻銘を残す顕著な遺産である点、スズや銅といった複数の鉱物が産出された評価の高い鉱山である点、さらには蒸気を使用し副産物としてヒ素を産出していた鉱山という点であった。世界遺産登録の際には、1700年から1914年までの鉱業に

特化して構成資産が選ばれ、また鉱山の中でも産出する鉱物の種類が少なかったものは除外された。

コーンウォールの住民らの世界遺産に対する反応は冷やかかで、元鉱山労働者は世界遺産であることに不満であるとコメントしている。彼らにとって世界遺産選定は、地域住民の意見を聞かずにイギリス政府や専門家がおこなったことであり、世界遺産登録は、古代から連綿とおこなわれてきた鉱業の一時代のみを選別し、地域的なつながりを配慮せずに西デヴォンの鉱山と合わせて実現したものであった。つまり、世界遺産リストには、地域住民が自分たちのものだと理解する産業や風景とは異なる切り口で形成された景観が登録されているのである。

地域住民は、他方、古代から続く鉱業やコーンウォールに広がる田園風景に対して思い入れが強く、世界遺産であるということはアピールしないが、世界遺産センターとして設立された施設を地域サービスに積極的に活用したり、鉱業を含めたコーンウォールの歴史にちなんだ祭礼を開催して国旗を掲げて国家を斉唱したりと、田園風景・鉱山景観を活用した地域アイデンティティの再確認・確立が行われている。

イギリスの文化的景観の事例からは、国や専門家を主体としたナショナルからグローバルへの象徴的自然の価値付けに対し、地域住民らがナショナル・グローバルの理解を懐疑的に捉えて新たな象徴的自然の理解・解釈を紡ぐ動向が見て取れる。

(3) 人の越境と景観の越境

コーンウォール州からは鉱山技術者が世界各地へ移住しており、彼らは移住先でイギリスの鉱山技術を伝えるとともに、コーンウォールで見られる鉱山関連建造物を建設し、現地にイギリス風の風景を出現させている。過去の移住をきっかけにして、コーンウォール・レッドルス市とメキシコ・イダルゴ州レアル・デル・モンテは姉妹都市協定を結び、レッドルス市住民とイギリス移住者の子孫であるメキシコの人々との交流が盛んになっている。イギリス側では彼らの親類縁者がメキシコへ移住したことをノスタルジックに語り、イギリス式鉱山がメキシコに出現して独特の風景を形成していることがとても価値あることだと説明する。

一方、メキシコの関連施設の現地スタッフによる語りでは、イギリス人移住者による鉱山経営は、メキシコの鉱業史の一部でしかない。スペイン人入植によってスペイン式の鉱山開発が進められ、その後、イギリス人によって蒸気を活用した近代的鉱山開発がなされた。現代に至るまでにはメキシコ人が自ら鉱山開発・経営をおこなった時期もあり、20世紀以降はアメリカ人による現代的な鉱山開発・経営がなされている。イギリス人が、彼らの地元の景観に類似していると語るメ

キシコの景観は、実はメキシコ人にとっては、イギリスの影響も受けた、複数の地域のエッセンスを含有する景観である。

なお、メキシコにはプエブロ・マヒコという、突出した魅力を有する町を選定する制度があり、レアル・デル・モンテも選ばれている。現地で人々を魅了しているのはヨーロッパ風の町並みならびにイギリス式の鉱業遺産である。メキシコの観光地には、ヨーロッパ風の建造物や街並み等が人々を惹きつけているところが複数あり、レアル・デル・モンテも鉱山についての語りとは異なって、観光実践では「イギリス風」というのが有用な切り口となっている。

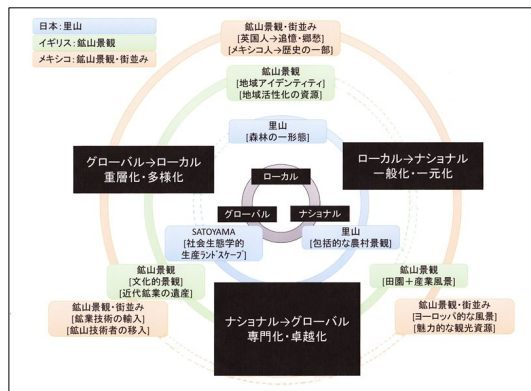
イギリス・コーンウォール州とメキシコ・イダルゴ州の交流からは、人の越境にともない景観も越境したが、形成された景観に対する視座はイギリスとメキシコで異なるだけでなく、メキシコの中でも複数存在することがわかる。「象徴的な自然」としての景観の越境は、あくまでも人の越境に付随するものであり、人々の交流の中で複数の「象徴の仕方」が生み出されていくのである。

(4) まとめ

上記の研究成果をまとめると、以下の点が指摘できるだろう。まず、里山の越境については、ローカルからナショナルへと浸透していく際に、一般市民の議論で象徴的な自然の解釈が広義に変化し、一般化・一元化が起きる。その里山がナショナルからグローバルへと浸透する際には、専門家による議論で解釈が狭義になり、受容できる人々が限定される。専門化・卓越化が起きるのである。

イギリスの鉱山景観の越境は、ある地域の景観を国が世界遺産に登録しようとするナショナルからグローバルへの動きから始まると理解できる。その際、従来の地域住民の理解とは異なり、専門家による選定によって新たな切り口で景観が形成される。世界遺産登録後のローカルにおける反応は、世界遺産に対する否定的な語りが主となる一方、グローバルな切り口とは異なる視座で地域住民が自分たちのアイデンティティを再確認し、確立していく。田園風景や鉱山景観に対する解釈の重層化・多様化が起きると考えられる。

メキシコに越境したイギリスの鉱山景観をみてみると、グローバルからローカルへと対象がシフトする際に、イギリス・メキシコの双方で象徴的な自然に対して各々の解釈、語りがなされるようになる。ここでも、重層化・多様化が起きている。この多様な理解に基づく鉱山景観や街並みが、ローカルからナショナルの制度に反映され、国内で観光活用される際には、「イギリス」「ヨーロッパ」といったメキシコ国内で価値を認められやすい切り口で包括され、一般化・一元化が起きる。以上の点をまとめたのが以下の図である。



複数の地域での人類学的フィールドワークに基づいて「象徴的な自然」の越境を精査したことで、ローカルからナショナルへの一般化、ナショナルからグローバルへの専門化・卓越化、グローバルからローカルへの重層化・多様化というダイナミズムが捉えられた。

本研究は最終年度末まで実地調査をおこなっており、本報告書の内容は平成 28(2016)年 6 月現在のものである。報告書提出後にも上記の点をさらに精査して口頭や論文で研究成果を発表し、国際的なグローバル化の議論に新たな視座を提供したい。

<引用文献>

Hirsch, Eric, Landscape: Between Place and Space、Hirsch, Eric and Michael O'Hanlon (eds)、The Anthropology of Landscape、1995、Oxford University Press、1-30 頁。

Hoskins, W.G., The Making of the English Landscape、1977、Hodder and Stoughton。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Megumi DOSHITA、Cosmopolitanism, tourism, Encyclopedia of Tourism、査読有、2015、1 - 2。

DOI : 10.1007/978-3-319-01669-6_38-1。

Megumi DOSHITA、The globalization of symbolic concepts of nature: A case study of Satoyama, Tama University School of Global Studies Bulletin、査読無、7 巻、2015、1 - 15。

Megumi DOSHITA、Re-evaluating rural environments: Rural tourism development in Japan, Journal of Tourism Consumption and Practice、査読有、6 巻、2014、28 - 51。

堂下恵、二次的自然の観光資源化の再考 - SATOYAMA のグローバル化を踏まえて -、第 28 回日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、2013、293 - 296。

〔学会発表〕(計 6 件)

堂下恵、イギリス・コーンウォール地域の景観に対するグローバルな価値付け - 景観ツーリズムの事例より -、日本国際文化学会

第14回全国大会、2015年7月4日、多摩大学（神奈川県藤沢市）

堂下恵、グローバル化の新たな視座の検討 - 世界遺産「コーンウォールと西デヴォンの鉱山景観」の事例より、日本文化人類学会第49回研究大会、2015年5月30日、大阪国際交流センター（大阪府大阪市）

堂下恵、観光と保護制度の関係についての再考 - 日英の事例の比較 - 、総合観光学会第26回全国学術研究大会、2014年6月21日、下関市生涯学習プラザ（山口県下関市）

Megumi DOSHITA, An analysis of key terms related to environmental tourism and protection: with reference to satoyama, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014 with the Japanese Society of Cultural Anthropology, 2014年5月16日、幕張メッセ（千葉県幕張市）

Megumi DOSHITA, Rethinking the concept of satoyama in and beyond Japan, Research Forum, School of Global Studies, Tama University, 2013年10月10日、多摩大学グローバルスタディーズ学部（神奈川県藤沢市）

Megumi DOSHITA, The de-territorialisation and re-territorialisation of environmental perspectives with reference to satoyama tourism in and beyond Japan, International Geographic Union 2013 Kyoto Regional Conference, 2013年8月5日、国立京都国際会館（京都府京都市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堂下 恵 (DOSHITA, Megumi)

多摩大学・グローバルスタディーズ学部・
准教授

研究者番号：90434464

(2) 研究分担者

なし